韓国人が日本をフィールドワークし、民族誌を書くということ

－韓国人による日本社会の人類学的研究とその認識論的考察－

金　良柱

培材大学校 ロ日中国学部日本学科教授

1．序

民族誌的あるいは民族誌学的（ethnographic）研究というのは、広い意味でいう人類学的研究の方法論的な側面からみると、次のように定義できよう。自分が属する自文化とは異なる異文化あるいは他文化を理解するために、そこへ足を入れ長期滞在しながら現地調査＝フィールドワークを行う。その後自文化に回帰し、その構成員を対象に文化の解析誌としての民族誌を記述する研究領域であると。本論文はこのような日本社会の民族誌的研究過程即ち日本社会をフィールドワークし、民族誌を記述する過程の中で遭遇し考えたことを自己回帰的に考察している。1983年日本社会・文化の人類学的理解のための渡日以降1992年帰国するまでの筆者が日本の中で行った一連の民族誌学的過程、つまりコースワークに継ぐフィールドワークそして民族誌記述作業それ自体に照らしてみる作業である[1)]。したがって‘日本社会のフィールドワーク認識論’というふうに命名してもいいと思われる。

本研究作業が持つ意味は概略的に次のように整理できよう。まず、日本社会・文化を対象にした民族誌的研究に対する自己反省的な省察作業の必要性という意味付けである。1980年代から始まった韓国人による日本社会のフィールドワーク作業以来現在まで約20年に近い研究蓄積ができ、これに対する省察的作業の必要な時点であると

の認識である。一方、日本社会の研究に携わってきた研究者はそれぞれ異なるコースワーク過程と関心領域そして研究対象地＝フィールドを選択している。これはフィールドワークと民族誌作成にも相違する特徴的性格を露呈することになる。このように、日本を‘人類学する’人々とその作業に対する認識論的検討が必要な時期であるとの認識から、そしてまず個人的な次元から自己省察的作業が必要であるとの認識からこの論文は出発している。これが現在フィールドあるいは留学地から人類学者としての通過儀礼を終え、自国に回帰して活躍しているいわゆる１世代日本研究者だけではなく、フィールドワーク過程中の研究者そして日本現地で活躍中である研究者にもその領域的拡大が可能な作業として提案的性格と意味付与ができると思う。また、日本社会の中でどのような経験をしているかについて関心をもっている日本人研究者にも勿論興味を引くテーマになるであろう。この一連の作業は今後日本社会・文化研究のための発展的模索であり、同時に韓国人類学の量的・質的蓄積にも繋がる基礎作業として位置づけることができよう。

以下本論においては若干の研究史的検討とともに、これに関連する問題群を扱うことにする[2)]。‘日本を人類学する’つまりフィールドワークし民族誌を書くという過程の中で生じる問題にはどのようなものがあるだろうか。特に韓国人がそれを行う場合にはどのような問題にぶつかることになるのか。このような質問に対する答えを引き出すためにまず韓国人によって行われてきた日本社会に対する民族誌学的研究の現況から検討することにする。

２．日本社会の民族誌学的研究

まず、日本社会を対象にした民族誌的研究[3)]を韓国人によって行われた作業に限定するとすれば、前提条件として研究者の世代と関連し簡略ながら点検が必要であろう。これは研究の流れを把握するための基礎的点検につながるからである。もし日本社会に対する研

究を民族誌的研究方法論という狭い領域から離れ全方位的に範囲を拡張し、時間的には20世紀初めまで拡大すれば、この作業に従事してきた韓国人は大体3世代に区分けすることができる。これは日本と関連した韓国社会の国籍変化に従った分類であるという点を先に指摘しておく。これは日本社会を対象にする場合、相違する経験による異なる視覚の存在可能性を提示することにその目的がある。

このような基準による第1世代は朝鮮人として生まれ、途中日本人そして韓国人になった人である。これらは日本に併合された1910年8月22日以前に出生した人で2001年現在90歳以上になっている。第2世代は最初は日本人として生まれたが後韓国人になった人々である。これらは日本国民になった1910年8月22日から日本国民という国籍から抜け出た1945年8月14日の間に生まれた人々で90歳以下55歳以上がこれにあたる。第3世代は大韓民国の成立とともに韓国人の国籍で生まれた人で、解放された45年8月15日から現在までの出生者である55歳以下の人々がこれにあたる[4]。

このような世代分類からみると、韓国人による日本の民族誌学的研究は何といっても第3世代によって本格的に始まっているといっても無理ではないだろう[5]。事実上、韓国人を含めたアジア人による長期フィールドワークに基づいた日本社会・文化の民族誌的研究は、80年代に入ってから始まったといえよう[6]。80年代末まで韓国人が行った人類学的日本研究の現況を韓国文化人類学誌に掲載された論文を中心に検討した崔吉城は次のように指摘している。

> 韓国の人類学において、外国を調査して研究するという伝統はほぼ皆無に等しい。異国民族学として、人類学を受け入れた韓国の人類学は、創立30周年を過ぎた現在においても異国社会でのフィールド調査資料を基礎にして、理論化するところまではいっていない。……（中略）……最近になって少ないながら、台湾、日本などで人類学的調査が行われていることを耳にしているが、その結果が韓国内で出版発表されていないので、その事情は把握し

にくい。民俗学では韓国民俗の日本への伝播を探るために日本民俗に関心をもち、短期間であるが、現地調査が行われている。（中略）…それに比べ人類学の調査研究は非常に少ない。「韓国文化人類学」既刊20巻で海外を対象とした論文は、…（中略）大部分は本格的な実地調査に基づいてはいない。以上のうち日本に関する研究は李光圭、文玉杓、崔吉城の論文だけである。（崔1989:382- 383）

このような指摘につづき、李光圭（1981，1983）が行った作業は在日韓国人に関する研究であり、日本・日本人に関する直接的な研究ではないことを指摘している。一方、崔吉城（1986）については、日本の祖霊観と韓国の祖先観の比較という面において、また金宅圭（1982）については、日本の東北地方の同族部落と韓国の安東地方の河回同姓部落の比較など、韓日両国の比較研究という面において成果をあげていることを述べている。一方、このような一連の研究とは差別性をもっている作業として文玉杓（文1983）だけが、‘長期間にわたる本格的な現地調査を通して行った社会人類学的研究として貴重なものである（崔1989:382）’ことを認めている。これに付け加え、最近活発になった若い世代による今後の日本研究に大きな貢献を期待していると結んでいる。以上言及した以外にも広い意味における日本学のカテゴリーに入る日本研究者は、様々な分野において研究を行っており、その蓄積も少なくない（최길성 1980）。また、指摘のとおり、民俗学側からの比較民俗の観点で日本を取りあつかっている研究も多少ある。

しかし、長期フィールドワークに基づいた本格的な日本社会の人類学的研究は、1980年代に入ってからようやく始まったといっても過言ではない。その嚆矢は、文玉杓といえるだろう。文玉杓は、留学先の英国から1981年渡日し、群馬県片品村花咲で約１年半のフィールドワークを行った。彼女はこの地域の観光産業発達を中心にして、日本の農村経済発展に伴う文化変動の過程に焦点をあてて考察

し、その結果は博士論文としてまとめられ（Moon 1984）、後に単行本として国外（Moon 1989）と国内（문옥표 1994）で出版されている。留学先から帰国した後も、日本と韓国における女性の社会参与類型の比較研究及び現代日本社会における文化変動と伝統の再認識の問題などに関心をもって活発な日本研究を行っている。

彼女以降一群の研究者が後を継いでおり、彼らを長期フィールドワークに基づく民族誌的日本研究の第１グループといえよう。それにはいくつかの下部類型があり、その一つは80年代を通して日本でコースワークとフィールドワークを行ったサブグループ、次はアメリカでコースワークをしながら日本をフィールドにしたグループ、あとは韓国国内でコースワークをした後日本でフィールドワークを行ったケースである。

まず日本留学派としての黄達起は、福島県田村郡瀧根町で85年と87年に約1年間フィールドワークを行った。贈与交換を中心に整理された民族誌は一橋大学に学位論文として提出され（黄達起 1990）国内では「일본의 사회와 교환（日本の社会と交換）」（1992）というタイトルで翻訳紹介された。金良柱は1987年から88年までの約２年間高知県の四万十川下流にある中村市を中心にフィールドワークを行った。地域社会の祭りを通じて現代の地域社会の動態を捉えようと試みた民族誌は東京大学の学位論文として提出された（金良柱 1994）。崔仁宅は、三重県鳥羽市菅原で1987年４月から1988年９月まで親族と社会組織を中心にフィールドワークを行った。村落共同体の社会組織及び象徴論的空間、死者祭司（崔仁宅1989）などに関心をもって研究を続けている。

アメリカ留学組の鄭炳浩は1987年から1989年までの数年間、日本の初期教育過程をみるため関西地方を中心に各種の保育園をフィールドワークした。後に比較研究のためその対象地域を北海道と沖縄まで広げ、その民族誌はイリノイ大学に学位論文として提出された（Chung 1992）。韓敬九は1988年から1989年まで、東京板橋区成増の印刷工場でフィールドワークした成果をハーバード大学に学位論文

として提出し（Han 1991）、後に「회사로서의 기업（会社としての企業）」（1994）という単行本を国内で出している。権粛仁は90年から91年の間に会津若松でフィールドワークしたのを地方のアイデンティティ問題を地域においての言説とその実践というテーマで民族誌をまとめている。その結果はスタンフォード大学に学位論文として提出し（Kweon 1994）、のちに「現代日本社会と地方のアイデンティティ」（1996）というタイトルで日本国内で翻訳出版している。

洪ソンフップは韓国国内派であるといえよう。91年から92年の間栃木県をフィールドにし農業形態を中心としてまとめられた民族誌はソウル大学に学位論文として提出された（홍성흡 1995）。これら以外にも日本でフィールドワークを行ったがまだその結果が出ていない第1世代群には李チンヨンがいる。彼は89年から沖縄研究を中心に日本国内で活躍している。これら第1グループにつぐ第2グループにも一連の研究者が日本の中でコースワークあるいはフィールドワークを行っている最中である。その作業が終わって帰国している林慶澤は千葉県佐原市での都市化過程を民族誌にまとめている（林慶澤 1999）。また、日本留学派の中には日本民俗学を専攻し、韓日比較民俗分野で研究領域をもつ研究者グループもいる[7]。

その他にも、国内から直接渡日するケースは勿論のこと、アメリカに留学している人の中にも日本をフィールドとして選ぶ傾向は最近強くなっており、当分続くと思われる。その理由としては、地理的・歴史的関係は深いが現在において学問的蓄積がないことに対する反省とともに、日本が異文化理解の先決の対象であり最良の対象であるということをあげることができよう。また、言語と生活の面において比較的に負担の少ない現実的な点も作用しているように見える。以上との関連で日本研究者がどのようなコースワークとフィールドワーク過程を経路しているかについては別稿を設けて考察する必要があることだけを記しておく。

3．民族誌学的作業における問題群

この‘日本フィールドワーク認識論’は事実上大きく三つの時間的領域から構成される。その第一は83年４月から87年５月までの約４年間である。この期間は東京の留学先大学と市内のいくつかの居住地が中心の生活領域になっていた。この時期はコースワーク期間であると名づけよう。二番目は87年５月から89年３月までの約２年間で、この期間中に高知県の四万十川流域を主な生活領域にしながら本格的なフィールドワークが行われた。三番目は89年４月から91年６月までの約２年あまりの期間がこれにあたり、デスクワーク即ち民族誌の作成に使われた時期である。フィールドから東京に戻ったので生活の中心領域は一番目の時期と同じになる[8]。このような各過程別に生じる問題点は多様であり各々が重要なテーマになる。しかし、何よりも重要であり認識論の対象として検討すべき必要性と可能性のある問題群は次のようなものである[9]。

（1）‘後進’と‘先進’あるいは‘未開’と‘文明’の問題

近代人類学の伝統は、西欧の文明社会が世界各地の未開社会を研究することであった。ところが、その逆のケースが増えている。誤解を避けるためここでは‘未開’の代わりに‘後進国’あるいは‘開発途上国’に、また‘文明’の代わりに‘先進国’に用語を変えた方がいいかも知れない[10]。つまり開発途上国の人類学者が先進国を研究対象にし始めているのである。韓国人による日本社会の研究がまさにそれに該当する。この場合、即ち後進国から先進国をフィールドワークする場合如何なる問題点が生じるのか。

まず一つは欧米人（いわゆる‘外人’）が日本社会をフィールドワークすることは、韓国人を含めた非西欧人（‘外国人’）が行うそれとはいろんな面において違うという点は十分予見できることである。調査者がフィールドに足を入れるときからその過程すべてにおいて

フィールドワーカー自身の心構えは勿論、住民の反応・態度・待遇など様々な面で微妙に違ってくるのではないか。これとは若干異なるが韓国と日本の植民－非植民的歴史の過程から生じる問題もある。例えば韓国人に対する態度は世代別に違ってくるが、韓国あるいは韓国人に対する認識が既にある程度出来上がっている場合もある[11]。従って、何も先入観を持っていない対象との接触ではなく、それなりの各自の観を持っている限り、お互いに価値中立的な立場をとるということは幻想であり虚構である。むしろその側面を西欧人によるフィールドワークとは違って相対化させ、積極的に捉えていく必要がある。

したがってフィールドワークの段階では勿論民族誌を書く段階においても、自分に内在する韓国人性を丸出しにすることを躊躇することになる。コースワーク地は西欧で日本をフィールドに選んだ韓国人人類学者からよく聞ける“調査の時には日本語より英語を使ったほうが有利で効果がある”という発言はまさにこれを反映するいい例であろう。またエスノグラフィーを書く段階でも、自分の理論的背景と枠組みとして西欧的パラダイムに意識・無意識的に影響を受けることになるだろう。だから後でエスノグラフィーの中で筆者自身が見えなくなってしまうという指摘を受けることになる。他の理由もあろうが、自分を出すということはそれほど簡単なことではないので、結局コースワーク中に慣れた枠組みに自分を容易く入れた結果であることを意味する。これはコースワークの問題とともに、‘後進’が‘先進’をフィールドワークするところからくる無視できない問題であり、これからも同じ状況に直面するケースが増えるにつれ深刻に検討する必要がある問題であろう。

（2）‘日本民俗学’と現在・変化の問題

日本社会・文化を民族誌学的に研究しようとする韓国人が一度は対面するものの一つに‘日本民俗学’という領域がある。日本にとってのアウトサイダーのすべてに通用する話であるかも知れない

が、ここでは一応韓国人に限定することにしよう。同時にいずれ一度は出会うとの表現をしたが、日本と遭遇するその時から避けることのできないと表現したほうが正しいかも知れない。

日本民俗学という存在は、日本という現場で作業を行うときにより明確に目の前に現れる。日本という現場で出会う日本民俗学は、一種の洪水あるいは泥沼かも知れない。量的側面においては洪水であるといえ、質的側面においては泥沼であるといえよう。いったい韓国人フィールドワーカーに日本民俗学はどんな影響を及ぼしているのか。

フィールドに入る前に私が用意した準備物の中には、「日本民俗学調査ガイドブック」というものがあった。この本は日本で地域調査をしようとする場合、何をどういうふうにすればよいのかという説明から具体的な質問項目に至るまで細かくかつ親切にガイドしてくれている。私もこの本に書かれている調査項目や質問項目にそって調査をすすめていくことにしていた。ところが、フィールドに入ってから間もなくそれがそれほど役に立たないものであることに気付きはじめた。そのガイドブックに載っている調査・質問項目は、昔のものの中で今も残っているものが何かを調べるには有効であったかもしれない。また、そこに書いてある質問を地元の物知りや年寄りにぶつけたら答えてくれることができるかも知れない。しかし、目の前に広がっているフィールドの現実を捉えていくのに、これらの質問項目は時代後れのもののように思われて仕方がなかった。

私がフィールドで目の当たりにした現実は、民俗学者の報告書に記述されているような情景、またそれによって形成された私のイメージをくつがえすのに充分であった。礼服に身を包んで厳粛な身ごなしで儀礼を行う神官は、同時にジーンズをはいてスナックでカラオケを歌っていた。普段着姿の神輿担ぎなどは、映像でみて抱いていたイメージ即ち伝統的な衣装と装飾で飾っているそれを徹底的に裏ぎるものであった。つまり日本民俗学で描いている世界、それを読むことによって意識・無意識的に形成された絵のようなイメージ

に対する徹底的な裏ぎりであった。無論最初からそれを信じ込んでいたわけではないしそうでもないだろうとは思っていたが、直接フィールドでそのような場面と対面した時の戸惑いは大きかった。フィールドワークを進めていくにつれ、日本民俗学が描いている世界つまり秩序整然で、童話的で、ノスタルジックで、静態的な、郷愁を呼び起こすものはすでになく、文献の中にだけ存在していることが段々確実になってきたのである。

そこでみつけた出口は、未練なくこのガイドブックを捨てることである。それによって作られていた幻想を求めさまようことをやめることにしたわけで、目に見えるものをそのまま受け入れることに努めたのである。そして面白く見えるものがあれば、何でもそれに取り組むという姿勢を取ることにした。依然ガイドラインがなくなったことへの不安は残っていたが、目の前の現実に充実することこそが現地の状況を早く把握する道につながると確信するようになったのである。

日本民俗学の場合、データの収集における古老は不可欠の存在である。民俗学調査において何よりも重要なインフォーマントは古老であり、その人から話を聞くことが作業の大部分を占めるといっても過言ではないだろう。つまり、インフォーマント＝古老であるという等式が成り立つ。それが意味するのは、現実生活の中に沈殿物のように沈んで残っている‘古いもの’に興味をもちそれを拾うということである。日本民俗学のガイドブックが提示する調査指針の冒頭にもそのように記述している。よってその影響から自由でなかった私の場合も、フィールドワークの初期は年寄りにこだわっていたのは事実である。しかし現在のことに関心をもち関係資料の収集や状況把握のためには、一日中のんびりと座り込んでよき昔の思い出に浸っている年寄りよりはむしろ、今現在動いて活動している人々との接触が大事であった。自然にインフォーマントは年寄りより若い人にしていくことが多くなっていた。無論現在を把握するためには過去のことも重要であり、聞く価値も充分にある。また私自

身もそれをまったく無視したわけでもない。しかし私にとっては今現在を生きている、そして現在を作り出している人々の行為と思考を知ることがより重要であるように思われたのである。古老の話はそれ自体が目的ではなく、解釈の対象になっていたのである。

日本各地には、各々の自治体が主管し刊行している「市町村誌」がある。流域社会にも例外ではなく「中村市史」（中村市史編纂委員会 1969）のような地域特有の地誌類がある。それの執筆には地元の郷土史家や民俗学者が携わっている。これをめくってみると、特に民俗編という項目を設けて地元の伝統行事や芸能を紹介している。また、それ以外にも報告書、地元の新聞・雑誌、自費出版、単行本、未刊行記録、研究会の発表などのように多様な形で彼らの研究結果をみることができる。

ところが、そこには現在伝わる伝統行事や儀礼が古くから連綿と伝承されてきたかのように記述されている。例えばある伝統的祭りに関する記録の場合もそうであるが、地元の資料の記述を見るかぎりいつの時期を想定して書いているのか明確ではない。長い歴史過程の中で起きた可変の可能性－添加、削除、変形－に対する前提や理解の不足が感じられるということである。つまりこれらの記述は伝統行事や儀礼が不変的・安定的・孤立的であるという枠から一歩も抜け出ていないのである。

中には伝統行事や儀礼の由来とその内容についてはある程度詳しい場合もある。しかし内容においてもどのような組織で、どのような経費の捻出をもって維持されてきたかということに至るとほとんど乏しくなる。また、組織が崩壊したり維持費が確保できなくなった原因を探って行事や芸能の廃絶や変革を説いた例もほとんど見当たらない。伝統賛美に陥って具体的な対策もないままに、すでに形骸化して久しい行事や芸能の復活や伝承をただ精神論として力説する（神崎 1988：22－25）場合もある。これは民俗学者が自分も知らないうちに、伝統の商品化および大量生産に協力する可能性もあることを意味する。ここからは、人間関係（ネットワーク）や社会関

係などは見えてこない。また、政治・経済的な側面もあまり取り扱っていない。つまり、変化と動態の姿はほとんどみえてこないということになる。現在と変化を捉えるのに失敗し、その脱出口をみつけるのにそれほど成功していないようにみえる日本民俗学は、フィールドワークの全過程において重要な反面教師であったといえよう[11]。

（3）‘書く文化’における‘書かれたもの’の問題

フィールドワークが進むにつれ、訪ねて話を聞かなければならない人が段々増えていく。ある日、下田地区で毎年行われている「スミヨシサン」（住吉神社祭り）に出される「タイコダイ」（太鼓台）について詳しく知っている年寄りがいるとの話を聞き、その人を訪ねていった。彼は私の訪問目的を聞いては“どうのこうのくだらない説明をするよりはこれを読んだほうが早い”といって一冊のノートを私の前に出した。それは彼自身の筆で整理し、保管していた「太鼓台」に関する記録であった。

「ハチマンサン」の予備調査のときも同じことに出合った。不破八幡宮の宮司さんは、地元民俗学者が「ハチマンサン」の儀礼について整理したプリント物を出して“説明だけでは理解しにくいから、これを読んでみるとよくわかる”と言っていた。彼の自宅の本棚には「定本柳田国男集」と「旅と伝承」がびっしりと差し込まれていた。これ以外にも調査のため訪ねていくと、個人にしろ、家にしろ、団体にしろ、行政官庁にしろ、口による説明より紙束が多く出される。何かについて質問したら、話の末に私の前には二三の文献が必ずといってもいいくらい置かれていた。

書く文化をもっている日本は、至るところに文献があふれている。まず、柳田国男から始まるそうそうたる学者の文献がある。アウトサイダーのフィールドワーカーにとってはそれだけを渉猟するのにも数年はかかるかも知れない量である。さらに、地方に行けば、その地域の数多い史料とともに、必ずと言ってもいいほど、その地域の郷土史家あるいは地元の民俗学者による文献がある。市町村史、

報告書、地元新聞・雑誌の寄稿文、専門学術誌の掲載論文、刊行回顧録、筆写本、行政機関の刊行物など様々な形で残されている。

そうなると、現地調査者は－彼が日本語に熟達したものであれそうではないものであれ－文献に対するプレッシャーを感じざるをえない。それを初めから無視するか相対化する戦略を取らないかぎり、それの溺れ死にになってしまう恐れさえある。この文献の圧力から自由になることは、日本を研究する際、最初から最後まで抱える問題であり、解決策を自分なりに模索しなければならない問題でもある。

一方、語る文化ではなく書く文化では、書かれたものは語られたものより権威を持つようになる傾向がある。例えば、文書や記録を見ながら儀礼を進行していくのを良く見かけた。儀礼の執行者はその儀礼に関して残された記録について全面的な信頼を持っており、儀礼の執行においてはそれに頼っているように見えた。儀礼だけではなく、あらゆる行事の進行においてこのような傾向を見かけることはそれほど難しくない。日本の場合、あることを始める前にそれに対して緻密な計画を立てる。その計画過程は全て誰かによって記録される。その後その記録通りに物事を運んでいくのである。他の地域－東京－よりかなりいい加減なところがある（という初印象をおぼえた）フィールドの住民も、この面においては例外ではなかった。

このように記録をしその記録を実践している、‘書く文化’としての日本社会を民族誌学的な方法で研究する人類学者は、どんな戦略を選択すべきか。この記録自体が持つ参考文献的性格は尊重する必要がある。しかしこのような記録に依存したいという傾向は、その欲望が強いだけ警戒する必要性も大きくなる。現地では集めるだけでも安心感を与えてくれていた現地記録の複写本の多くは現地を離れてから後の民族誌作成の段階でそれほど役に立たなかった経験がこれを裏付ける。結局その記録物が持つ補助的な性格でとどめそれ以上の依存は避けるべきであり、より積極的な方法は記録物そして

記録する文化それ自体を相対化し、分析対象にすることであろう。

（4） 親和化と‘似以非’の問題

約9年間という決して短くない期間を日本に滞在しながら、日本の社会・文化の人類学的研究を続けてきた。しかし、その大部分の時間は大学の研究室の中で、人類学の訓練をうけることや、日本に関する文献をあさることに費やされた。これは後に日本社会をフィールドワークをすること、またエスノグラフィーを書くことにどういう影響を及ぼすのだろうか。

これと関連した問題として指摘できる問題の二つの中でその一つは、長期滞在からくる日本社会への慣れあるいは問題意識の薄れであり、もう一つは、コースワークという過程からくる日本的学風あるいはパラダイムの影響である。人類学者が自分と違う社会に入った場合全ての疑問は最初の半年の間に生じ、その疑問が当該の文化を理解する重要なキーワードになるということは多くの人類学者が指摘しているところである。以後行われる現地研究はその疑問に答えをみつけていく作業であり、それを解いていく作業に他ならないであろう。従って調査という目的だけをもって日本社会に入り1年ないし2年間のインテンシブなフィールドワークを行う場合とは、当然その立場が違ってくる[13]。

日本社会に足を入れてからもその文化の差異を見る目は研究者の持つ背景によって様々に違ってくることになる。例えば日本人が日本文化をみる目は外国人がそれをみる目と違うのは当たり前のことである。外国人といっても欧米人と韓国人はまた違ってくるだろう。また留学のように日本社会の中で長期滞在をした韓国人の視覚と調査だけが目的で短期滞在をしたそれとは違ってくる。ひいては韓国国内で訓練と教育を受けた後に日本をみる目と欧米でそれを受けた後の視覚が異なってくるのである。

したがって後者即ち‘日本的学風’の影響と内在化という点も無視できない問題として登場することになる。特に調査者というより

学生という立場は、自分自身を能動的というより、受動的にしがちである。これは後でもう少し詳しく検討することにする。以上のことは、エスノグラフィーを書くという作業に、微妙に影響を及ぼすことは十分予想される。一つは、エスノグラフィーの対象になる時期が、集約的フィールドワーク中の期間だけではなく、滞在期間全体に拡張していく必要があることを示唆する。

フィールドに入ってから初期は勿論のこと、かなりの期間が経つまで村の人々から私は中国人と誤解されていた。特に、道端で会う子供たちからは‘ニハオ’と挨拶されることが多かった。大人の中にも私が韓国から来たということはわかっているが、それは中国の一部であると思い込んでいるに違いないと思われる質問をするおばさんもいた。私の忍耐づよい説明と数回の講演によって、しばらく経ってからは小学校に通う子供たちから‘アンニョンハセヨ’という韓国語の挨拶を交わすようにはなったが。

一方、これとは違う反応もあった。私がフィールドで出合った年寄りは日本の帝国主義時代の経験者であり、その中にはいわゆる「半島経営」の直接経験者もあった。彼等の場合は、私自ら明かさなくても最初に交わされる対話から私が韓国人であることをすぐ分かる人もいた。彼等は、韓国－正確には植民地時代の朝鮮－についての知識もかなりの水準までもっている。韓国についてほとんど認識と知識を持っていない若者よりは、話を進める上では便利な側面が確かにある。

しかし、時間が経つにつれてだんだん難しさを感じることが多くなった。それは彼の中にすでに自分の経験による韓国人観、韓国観が確立されているからである。若者－といっても30代以上になるが－の中にも旅行経験者は例外ではない。しかし、それが好意的なものであれ、その逆であれ、両者の間に違いは存在している。前者のそれは強固で修正不可能に近いものであるに対して、後者は度重なる対話を通じて早いスピードで変わっていくものであった[14]。

まず、フィールドの住民がよほどの深い観察を行わない限り、区

別がつかない私の顔付きに問題の多くは潜んでいるようである。それは最初から見た目ではっきり違う顔付きをしている西欧人のフィールドワーカーが告白する調査中のエピソードを引くまでもないほど、自明のことである。住民にとって部外者が一人入ってきたということは知覚しているが、自分とは違う文化の人が一人入ってきたということにはそれほど自覚がないのに問題の出発点があるのだ。要するに、深く考えることなく、似ているということを同じであるとすり替えてしまうのである。

これは彼等の問題だけではなく、私の問題でもあるのに問題の深刻性は増す。つまり、調査者も現地人もお互いに違うという前提にたっていれば、問題は比較的簡単に済む。お互いの違いを最初から認め合うと、そのあとはお互いの理解を深めていく道だけが残っているからである。しかし、似ているということから、理解するという作業が最初からそれほど重要で、かつ必要な点であることに両者のどちらかが合意していない場合、問題は複雑になってしまうのである。こうなると相手が自分とは似てはいるが、非なるものだという認識に至るまでには、かなりの試行錯誤と時間が必要になるのである[15)]。

このことは日本を民族誌学的方法で研究しようとする韓国人－広くは東アジア－研究者が、最初に肝に命じておかなければならない注意項目の一つのように思われる。韓国人のフィールドワーカーは、後でみるいくつかの理由で、最初から日本文化を自文化とそれほど変わらないと－同じであると－思い込んでしまうような落とし穴に陥る可能性が高い。もし、そのような視覚修正がなくても、フィールドに入って自分が直接に経験してみれば、思っていたことよりギャップが大きいことを自覚できるだろうが、その時に遭遇する混乱は相当大きいものになるだろう。また、いままでの試行錯誤をおおまかにでも修正する作業を行わなければならないはめになる。いかにも簡単に処理できると思っていたカルチャーショックは後になって重荷としてのしかかってくるのである。その面、相手の違いをお

互いに認めてから出発している欧米人のフィールドワークとは、フィールドにおける状況がまったく違ってくるのである。

この自文化と類似する文化を研究対象にする際、調査者が得る利益は異文化に適応しやすいということであろう。しかし、これも錯覚にすぎないし、その裏腹に被る損害は思ったより大きい。いうまでもなく、似ているから気付かないものが出てくるし、見逃してしまう物事が多くなるということである。また、類似する文化の単純比較の危険性の問題もあるだろう。もし、この似ているが、微妙に違うということを浮き彫りにすることができるならば、つまり類似文化に対して注意深い観察と対話が可能になれば、西欧人による民族誌学的研究とはひと味ちがう研究の成果を上げることもできるのではないかと思われる。

（5） 共有の文字－漢字－からくる問題

韓国人は漢字文化圏の構成員の一人であるので漢字には慣れておりその解読も比較的早くできる。それに対し西欧人研究者の場合は漢字に慣れていないのでその解読は遅く、よって日本語で書かれた文献に接する頻度も低くなる。つまりこの事実は韓国人研究者は日本語の記録や文書・文献にたよる頻度が高くなり、日本的パラダイムに少なくなく影響される蓋然性を持つことを意味する。これは前述した長期滞在の問題とも絡んで漢字文化圏に属していることから由来する問題群について緻密に考える必要性の問題を提起している。

この漢字関連の問題群に孕まれている落し穴について認識することはいくら強調しても足りないところがある。それは民俗用語としてもフォークタームやネイティブタームに対する無意識に行う我田引水的な解釈の落し穴である。例えば日本社会・文化において基本的かつ重要な概念の一つである‘イエ’をサンプルにあげることができよう。筆者がこれを特別な記号即ちカタカナとかローマ字で表記することで自分の意思や意図を伝えようとする場合がない限り、普通は‘家’という漢字でそれを記すことになる。 これをみる韓国

人研究者は当たり前に‘가（ka）’と音読し、‘집（chip）’と訓読することになる。ところが問題は‘家’と同じく表現される日本社会における‘イエ’と韓国社会における‘chip’の間には含みがまったく異なる概念的差異が存在している。同じ漢字であるといって混同することになると、まさに誤解された異文化理解の一歩を踏み出すことになるわけである。

このように同じ漢字で注意しなければならないものには‘家’以外にも‘同族’のような単語もある。例えば日本民俗学や社会学の専門用語として頻繁に登場する‘同族団’や‘同族神’もしくは‘同族部落’のような用語は、韓国式の血縁的概念で容易く受容してしまう場合、深刻な認識上の誤謬を招く可能性が高いのである。‘風流’や‘祭り’‘祭礼’のような場合も同じである。

このように共有する漢字そして日本式造語をそのまま自文化的認識体系の概念と範疇の中で使う時に生じる問題群は日本社会を異なる文化、つまり異文化あるいは他文化の社会としてみることを妨げると同時に誤解と誤謬の余地を残すことに通じる。このような点は日本社会・文化を解釈する専門家としての韓国人人類学者が早急に検討すべきことであり、自文化の中での無節制な使用に対する自省を求める項目の中の一つであるといえよう。

（6） 固有名詞と抽象名詞の問題

私がインテンシブフィールドワーク中であった1988年10月、韓国ではソウル・オリンピックが盛大に開かれていた。道端で会う知り合いからのあいさつは、開会式の成功、オリンピックの無事成功を祝ってくれる言葉ばかりであった。私個人としてはオリンピックについて最初から冷ややかな目で見てきたし、それほど興味もわかなかったわけである。しかし、開催間近になった時期から言われ始めた挨拶代わりの言葉－オリンピックの時韓国に帰らないのかという質問と、テレビによって得られた韓国に関する話題と関心事－はそれが終わってからもしばらく続いた。

こうなると、自分は韓国の代表選手ではないという平素の信念をいつまでも持つにはいかなくなる。韓国は既に私にとっても彼等にとっても関係ない遠いところにあるものではなく、自分と完全に一体化されているものであることを改めて自覚するようになったのである。自分はいくら韓国で行われていることと関係ないと言い張っても相手はそうは思ってくれなかったのである。結局、私も韓国人の代表のように言わざるをえなくなってしまった。“おかげさまです。ご声援ありがとうございます”と。

このことが意味するのは何だろうか。それはまず私を私個人としてみていないということに帰着する。つまり、私がどんなに個人であることを主張しても、私は韓国人という抽象名詞に埋没されているのである。この経験を通じて私は相手－フィールドの人々－を個人として考えてきたということを改めて自覚と反省する機会を得た。いままで日本あるいは日本人という抽象名詞的なレベルから語ってきたが、これから必要なのは直接経験した個人とその接触経験から出発した固有名詞的表現と記述がともなうべきである。こちらが固有名詞的レベルからの接触を求めるならば相手に対しても同じくこの点を重視すべきであることはいうまでもないことであろう[16]。

その他、従来の日本文化に対するステレオタイプ的な認識、地理的条件からくる長い歴史的接触、植民—非植民の歴史経験からくる強力な先入観と偏見、これと同時に現在日本がもつ国際的な位相からくる複合的な態度、そこから由来しまた影響されている研究者の日本観と発言様式などの問題も指摘することができよう。これらは各々が新しい項目として追加され議論すべき認識論的テーマ群であろう。

4．課題と展望

以上韓国人による日本社会の民族誌学的研究を検討しながらフィールドワーク認識論という枠組みでいくつかの問題群を考察してみた。まだ足りない点も多くこのようなフィールドワーク認識論を発展させるためには具体的に補充しなければならない部分も少なくない。第一現在まで進められてきた韓国人人類学者による蓄積に対する緻密な分析を通して認識論のテーマを見つけだしその議論を深めていく作業が必要であろう。第二は日本研究者の間で多くて厚い認識論的議論が必要であり、またこれをより向上できるレベル高い認識論的作業の結果が生産される必要があるだろう。

このようなフィールドワーク認識論の作業を通じて目指すべきところの一つには‘我々の人類学’あるいは‘第三世界の人類学’への道の模索と発見があるだろう。周知のように人類学は文明社会が未開社会を対象に始められておりその長い蓄積の学史を持つ。つまり高いところから低いところへ向かっていった歴史を持っているのである。しかし現在人類学は多くはないが低いところから高いところへの移動がおきているのが現実である。いわゆる‘先進国’を‘非先進国’の人類学者が研究の対象にするケースが急速に増えているのである。

もしかしたら自分より経済的に‘後進’であると思われた地域や社会についての民族誌学的研究を遂行する時にも、以前の植民地膨張の帝国主義時代に西欧が行ったのとは違うフィールドワーク認識論が必要な時期にきているといえよう。この論文はそのようなフィールドワーク認識論についての自分の経験に基づいた一つの試みに過ぎない。人類学の教科書に見えるいろんな基本的かつ重要な概念は、実は西欧の人類学教科書からもってきたものである。文化相対主義という概念はまさに西欧が未開社会を眺める際の新しい概念として登場したものである。もちろんこの用語が普遍的な概念として

確立されあらゆる局面において適用されていることを否定する気はない。ここで指摘しようとすることはこのような概念が自分の立っている場から再検討され再整理されるべき時点にきているのではないかという点である。

一方第3世代によって本格的に始まった日本社会に対する民族誌学的研究は、日本の経済的成長と対外的膨張そして韓国内部における状況変化からくる新しい関心の増大から始まっているといえよう。同時に第2世代の視覚に対する懐疑とそれからの脱皮を計らう作業から始まっているのである。つまり新しい理解と方向の模索を試みているのである。しかしこの第3世代は生まれつきの問題点も多数内包している。この世代は上の世代からの遺産と教育即ち二重的感情の増幅を持っているわけである。この点が前で検討したテーマに内在する基本的な原因であるかも知れない。

いま韓国社会はいわゆる第4世代が社会の中心的な構成員として埋められている真っ最中である。この第4世代は第3世代を親として持つ世代で30代への突入を始めているのである。彼らは日本に対して比較的に相対化された視覚をもつ条件を備えている。したがって不透明ではあるが本格的な日本研究の可能性を孕んでおり、他文化の民族誌学的・人類学的研究の多様化と地域の拡大を期待できる世代でもある。実は彼らにこのフィールドワーク認識論が役に立つことを密かに願う。

異なる文化に対する理解と研究としての人類学はいまその知的資産と蓄積をもって自文化への回帰を始めている。その課題は時間の増加につれ減少しないテーマとして我々の目の前に迫ってくるだろう。この論文はこのような状況的認識とともに考えていく問題と解いていく課題についての問題提起の性格をもっている点に意味付与をしながら、最近の成果を対象にした検討と整理、そして理論的論議に対する細かい分析は後続の作業として委ねることにしたい。

注

1) ここでいうコースワークとは修士や博士課程などのように必須の教育課程を意味する。フィールドワークはこのようなコースワーク課程の中で必要であった人類学的現地調査課程を意味する。しかし、本文全体においてはこのような狭い概念としてのフィールドワークと広い概念としてのそれを併用することにする。前者は‘現地で行った実際の現地調査’を意味し、後者はそれとともに教育課程としてのコースワークを一緒にした全体をフィールドワークとして見なす概念である。これについては本文中で具体的に説明される。

2) ここで論じるのとは異なる形態への接近を構想中である。それはいわゆる人類学における伝統的な形式であるエスノグラフィー(ethnography)という形から離れたエスノノベル(ethnonovel)あるいはエスノエッセイ(ethnoessay)のような形式を通じてその認識論的テーマを捉えてみる作業になると思われる。

3) 日本の社会・文化のインサイダー(日本人)とアウトサイダー(外国人)による人類学的・民族誌的研究とその蓄積は多い(日本民族学会編 1966、1986; ヨーゼフ・クライナー編 1996)。まず、インサイダー(日本人)による研究はその量の面において膨大であり、特に日本民俗学者のそれまでをも含めると膨大な量になる。その質の面においても注目されるものが多く、その業績はインサイダー自身によって度々検討されてきた。一方、アウトサイダーによる蓄積も想像以上に多く、その多くは西欧人によるものである。それについての検討も度々行われてきている。また相対的に希ではあるが、非西欧人による作業の検討も日本内部で行っている。アウトサイダーによる蓄積の全体について、私の視角からの検討を行うこともそれなりに意味があるだろう。しかし、アウトサイダーの大部分は西欧人が占めており、全体の検討はそれだけでも大規模の作業である。また、それがここでの目標でもない。

4) これらは誤差を考慮し、前後に約5歳から10歳ほどの幅を与える必要がある。

5）もちろん第1世代と第2世代にも可能性は残しておくことにする。例えば、民俗学の領域を含めた各関連分野あるいは比較文化的観点から接近している場合に検討可能であろう。これについては他の研究者の作業（전경수 1999)が参考になる。

6）その成果の一部や各国の研究現況および問題点が日本民族学会により取り扱われている点がこれを裏付ける。例えば、日本民族学会の機関誌である「民族学研究」が1989年に特集号として出した‘外国人による日本研究’などがそれである。

7）彼らは民俗学会を活動領域にしているので、ここでは特に言及しないことにする。また90年代に入ってからの共同研究プロジェクトの場合も扱わないことにする。例えば93年高知県梼原で行われた研究などがそれである（전경수 외 1997)。

8）この三つの時期はそれぞれ違うが広い意味においては‘広意のフィールドワーク’の期間であるといえる。したがってこれをまた三つの名称で細分してみることができよう。第一は本格的なフィールドワークの前段階との意味でフリー・フィールドワーク、二番目は本格的で集中的なそれであるとの意味でインテンシブ・フィールドワーク、三番目は本格的なそれをつぐ整理作業の過程であるとの意味でポスト・フィールドワークと名付けることができる。これについては金良柱（1998）で詳しく触れている。

9）第一と第三の部分に対する考察はまだ本格的になされていないが、第二のテーマにたいしてはいくつかの先行研究で一部触れたことがある（김양주 1997, 1998, 2000; 金良柱 1994)。

10）例えば、“未開社会が文明社会を研究する”という発言は誤解を招きやすい。したがってここでは文化的な側面ではなく、経済的条件をもって話を進めたほうが誤解の余地を少なくするかもしれない。例えば、韓国人あるいは中国人は日本より自分の文化が劣るとは思わないだろう。つまり、自らを‘未開’であるとは思っていないのだ。しかし現在状況から見れば、経済的には確かに日本が優位であることは認めざるを得ない。一方‘先進’という言葉も誤解を招く余地の多い用語の

ように思われる。よってここではごく単純で簡単な定義に従うことにする。国民総生産即ちGNPのような経済指標によっていわゆるこの‘先進国’のグループに該当する国を指すことにしたい。例えばG7=先進7カ国のようなのがその概念に当てはまる。

11) 例えば、フィールド・ワーカーの価値中立的な態度の問題とも関わってくるが、調査中“韓国人にこれほど細かく知られたら、あるいはこれほどよく調べられたら困る”と言われたことがある。これは植民統治時代に朝鮮との関係を持つ人の発言である。彼は笑いながら冗談のように言っていたが、私はその冗談の中に骨があると思わざるを得なかった。

12) フィールド・ワークより戻ってからそれほど時間が立たないある日、日本のある日刊紙に次のようなコラムが載っていた。

柳田国男が苦心して作り上げた日本民俗学は今やほぼ脳死状態にある。最近のいくつかの著作—「これは民俗学ではない」や「宗教民俗学」、その他「都市民俗学へのいざない」という勇ましいものから、民俗学という看板だけ横からかっぱらって商売する「少女民俗学」に至るまで—は、いずれも「現在」をいかにとらえるか、ということに腐心しつつ、結局肝心の足元がみえていない点で共通している。

「経世濟民」をうたい、足元から問題を発見するというかけ声は昔から変わらなくても、実際説かれていることは、もはや日々の生活の実感から遠く離れた「民俗」を並べ、「伝統」を叫ぶだけである。

その「民俗」や「伝統」は今やこの情報資本主義の現実では売れ筋の商品として大量生産できることすら筆者たちは気づかない。で、この無邪気さが実践へ向かうと村おこしの片棒かつぎに直結する無残は何だろう。列島まるごと、いやアジアまるごと東京に化してゆく今、求められているのは身の大きさの現実を見つめる冷静な目なのに、さあ民俗学、もう安らかに眠れ。(朝日新聞1989. 12. 10付)

13) 私も例外ではなく、最初の1年間ほどは、言葉使いから生活習慣まで目に入ってくるもの全てが新鮮であった。同時に、まわりのものに対して好き嫌いがはっきりしていた。しかし、時間が立つにつれて、この最初の感情と新鮮味はかなり早いスピードで薄れていったのは言うまでもない。来日して間もないとき、下宿の隣にある銭湯にはいったことがある。高い番台の上に座っているおばさんは、私にとって驚きそのものであった。なるべく番台から死角の衣類箱を選んで、なるべく背中向きにし、こそこそと脱着をしていた自分であった。ところが、いつの日からか分からないが、おばさんの前で何も意識せずに行動している自分に気付いたときは、私も呆れたほどであった。

14) 住民との話し中—特に前者の場合が多かったが“あなたはなまりがないですね”とか“くせがないですね”とたまたま言われたりした。この言葉は私の日本語の能力を評価しての称賛の言葉であることには違いないが、それを単純明解に喜ぶのにはすっきりしない何かがいつも残る気がして仕方がなかった。それは私を日本人だと思ってしまうか、日本人ではないことは分かるが、しかし自分とはそれほどかわらないと思い込んでいるところから起因しているのではないかと思われたからである。

15) 例えば、日本語と韓国語は全く言語の構造が違う言葉ではなく、また、その言語の使い方も似ているから生じる誤解がある。尊敬語あるいはどういう脈略でその言葉が使われるか分からない場合、相互の誤解が生じる。私は実際一回の大喧嘩と、かなり親しかった一人の友人との別れを経験した。この場合は、最初から認識の不足というより、後になって慣れたことからくる認識の忘却がその原因であったが。

16) 筆者はこの問題について「固有名詞の対話を求めて」というタイトルでフィールドの地域新聞（高知新聞8月5日付）に寄稿したことがある。

<참고문헌>

권숙인

1996 현대지방사회와 지방의 아이덴티티, 서울: 서울대 출판부.

김양주

1994 "〔일본인식론〕시도, 그 하나--마녀로서의 일본 혹은 마녀사냥으로서의 〔반일〕", 교육연구 3: 59-75, 숙명여대 교육문제연구소.

1997 "한국사회의 일본관련 인식체계에 대한 고찰--〔일본인식론〕을 위하여" 국제한국학회지 2: 66-93, 국제한국학회.

1998 "일본 지역사회 이해를 위한 '틀'의 고찰-시만토강 유역사회의 필드워크와 민족지 기술을 중심으로", 『사회과학연구』 16: 357-375, 배재대 사회과학연구소.

2000 "시만토강 유역사회의 틀과 그 구체적 양상에 대한 고찰" 사회과학연구 19: 283-314, 배재대 사회과학연구소.

문옥표

1994 일본의 농촌사회-관광산업과 문화변동, 서울: 서울대 출판부.

이광규

1981 "재일한국인과 조사연구-大阪 生野구를 중심으로", 한국문화인류학 13: 1-52, 한국문화인류학회.

1983 재일한국인, 서울: 일조각.

전경수

1999 한국인류학 100년, 서울: 일지사.

전경수, 정병호, 한경구, 김양주

1997 물과 숲과 문화의 마을--일본 지방자치의 인류학, 서울: 서울대 출판부.

최길성

1986 "조상숭배의 한일비교", 한국문화인류학 18: 129-146, 한국문화인류학회.

1980 일본학입문-문화인류학적 시각, 대구: 계명대 출판부.

한경구
1994 공동체로서의 회사-일본기업의 인류학적 연구, 서울: 서울대 출판부.
홍성흡
1995 한국농민의 농업경영형태와 사회경제적 적응전략-관동평야의 한 촌락 사례연구, 서울대 박사학위 논문.
황달기
1992 일본의 사회와 교환-일본인의 선물/교환/인간관계 서울: 아세아문화사.
金良柱
1994 『儀禮の動態と現代日本社會—四万十川流域社會における[まつり]とその變化過程からのアプローチ』 東京大学博士学位論文.
1997 "固有名詞の對話求めて" 高知新聞 9.5 일자
金宅圭
1982 "韓・日両国のいわゆる「同族」村落に関する比較試攷" 江守五夫,崔龍基編 韓国両班同族制の研究,東京:第一書房,pp267-356.
日本民族学会編
1966 日本民族学の回顧と展望, 東京: 日本民族学協会.
1986 日本の民族学 1964-1983, 東京: 弘文堂.
1989 民族学研究 東京:日本民族学会.
ヨーゼフ・クライナー編
1996 日本民族学の現在－1980年代から90年代へ, 東京: 新曜社.
林慶澤
1999 日本の地方都市における商家の家業と社会的関係—千葉県佐原市の事例分析 東京大学博士学位論文.
中村市史編纂委員会編
1969 中村市史 中村市: 中村市
中村市教育委員会
1957 八幡宮神事について 中村市: 中村市

崔吉城
1989 “韓国における人類学的日本研究” 民族学研究 54 (3) : 382-383, 東京: 日本民族学会
崔仁宅
1989 “両墓制と死者祭祀: 鳥羽市菅島事例を中心に” 民族学研究 54 (3) : 338-346, 東京: 日本民族学会.
黄達起
1990 贈與交換の社会人類学的研究—福島県の農村の事例を中心として, 一橋大博士学位論文.
神崎宣武
1988 「地域おこし」のフォークロア, 東京: 紀伊國屋書店.
Chung, Byung-Ho
1992 Childcare Politics: Life and Power in Japanese Day Care Center. University of Illinois, Ph.D. Dissertation.
Han, Kyung-Koo
1991 Company as Community: A Processual Anthropological Approach to the Study of a Medium-sized Japanese Business Organization, Tokyo Inshokan Co, 1947-1990. Harvard University, Ph.D. Dissertation.
Moon, Ok-Pyo
1984 Economic Development and Social Change in a Japanese Village. University of Oxford, Ph.D. Dissertation.
1989 From Paddy Field to Ski Slope: The Revitalization of Tradition in Japanese Village Life. Manchester and New York: Manchester University Press.
Kweon, Sug-In
1994 Politics of Furusato in Aizu, Japan: Local Identities and Metropolitan Discourses. Stanford University, Ph.D. Dissertation.